

母子「相互作用」の基本的構造と、 その（人間）形成的機能における特徴

杵 淵 俊 夫*

（平成2年10月31日受理）

要 旨

通常のコミュニケーション活動の構造やその人間形成的機能をつきつめて考察していくと、その原基的形態としての母子「相互作用」にまで遡って、その機制や形成機能——の特有のあり方——を考えざるを得なくなる。母子「相互作用」の中でも最初期のものは新生児への母親の対応であるが、この時期の母子関係をも含めて、母子「相互作用」の機制の最も根本的な枠組は、母の側が、自分のものと基本的に同水準・同質の意図や役割取得の働きを、子の所作の背後に認め、仮設・挿入すること、しかも、極く自然に、自ら意識せずしてそうしてしまうこと、にある。母の側のまさにこのような対応の態度のとり方こそ、最初期の母子間の「相互作用」を辛うじて成り立たせているものであると同時に、また子の側を初めて共同生活へと所属せしめ、初めてコミュニケーション活動へと関わらせるところのもの、初期の母子関係に特有の機制である。

KEY WORDS

母子「相互作用」	mother-baby interaction
人間形成的機能	educational function
コミュニケーション・共同行動	communication or concerted action
生活共同体	community
共通理解	common understanding

はじめに：問題関心と課題の設定

——人間形成の原型としての母子「相互作用」の過程への着目と、母子間の「相互作用」は如何にして成り立っているか、ということへの問い

第一章 母子「相互作用」の特異な地位と性格

——通常のコミュニケーションまたは共同行動の構造との比較において

第一節 通常のコミュニケーションまたは共同行動の構造

- 1.) 通常のコミュニケーションまたは共同行動の諸過程
- 2.) 通常のコミュニケーションまたは共同行動の一般的構造
- 3.) 通常のコミュニケーションまたは共同行動における人間形成的諸機能

第二節 共同生活または生活共同体への原初的な参加の問題、および、母子「相互作用」の特異な地位と性格

第二章 母子「相互作用」を特徴づける一般的構造と、それに特有の人間形成的機能

* 教育基礎講座

第一節 母子「相互作用」の具体的な諸過程

第二節 母子「相互作用」に固有の一般的な構造

——母と子（乳児）の間の「相互作用」は、如何にして成り立っているか、という問題

第三節 母子「相互作用」における人間形成的機能の具体的内容と意味

はじめに：問題関心と課題の設定

——人間形成の原型としての母子「相互作用」への着目と、母子間の「相互作用」は如何にして成り立っているか、ということへの問い

われわれの間で発せられる言葉は、われわれ——即ち、その言葉が向けられた人々——が予め共通の仕方では理解している、一定の特殊な意味文脈に支えられ、補われて、その場の状況に適合した或る意味をもつ。勿論、その場合に、われわれは、この種の共有された一定・特殊な意味文脈を動員し参照するという自分自らの思考操作の過程を、通常——相手の言葉がよほど理解困難でない限り——自ら意識しているわけではない。しかし、その場に居合わせた人々に共有された、この種の、その都度の一定・特殊な意味文脈の支えと補完の働きがなければ、言葉——そして、行動や態度も——は、通常のような仕方ではもはや通用することができない。言葉は、如何なる現実の具体的な個々の場面や状況においてもすべて、直接そのまま適用され得るような仕方では、特殊に具体的に微細な多種多様な意味内容を、予めそれ自らの固定不変のストックとして担って、通用しているわけではない。むしろ、言葉は、それ自体としては——つまり、現実の具体的な状況の文脈を離れた場合には——、それが典型的な場面と文脈において典型的な仕方では使用された場合に、その言語を共有する人々ならば共通に理解するであろうと思われる、最も一般的且つ形式的な意味内容しか担っていない。われわれは、言葉が用いられる時、その言葉がもともと担っている、その種の最も一般的且つ形式的な意味内容を手がかりとして、さらに、特殊に具体的な行動場面・状況を共有するわれわれ自身の間で、予め共通理解されていた一定・特殊な意味文脈を、それに付加し補完しつつ、その言葉の意味を理解するのである。

それ故に、われわれの通常のコミュニケーションにおいては、上述の如き一般的・形式的な意味を担って、（特殊に具体的な、その場合の意味内容の理解のための）手がかりとして機能する言葉（言語記号）とともに、不可欠の働きを為し、重要な地位をもつものは、コミュニケーションの当事者相互の間に予め共有されていて、言葉のその都度の具体的な意味の理解のために動員されて参照される、一定特殊な意味文脈であり、さらにはその背景または母胎を成して広がる一定の意味体系である。当事者相互の間における、この種の一定の意味体系の共有と、それに基づく一定・特殊な意味文脈の行使ということなくしては、コミュニケーションの実現は困難である。コミュニケーションのより一層単純な形態、または未発達で単純な形態を辿てみると、言葉というよりは、動作や表情、または言葉以前の音声等を通じて行動の理解と共同を成り立たせる場合が存在する。この場合にも、言葉の使用を通じた通常のコミュニケーションの場合と同様に、やはり記号ないし信号として使用された動作・表情・音声等のその場合の意味を特定して共通理解に達するためには、当事者双方に予め共有されている一定の意味体

系の存在と、その一部分としての一定・特殊の意味文脈への参照ということが、必要不可欠である。

ところで、少し考えてみればわかる通り、コミュニケーションや共同行動の過程の成り立ちをまさにこのような仕方では考えることは、明らかに一個の循環論に陥っている。或る場面で特定のコミュニケーションや共同行動が成り立つためには、既にそれ以前に、その当事者の間に一定の意味体系の共有という事態が成立していなければならないが、この種の意味体系の共有という事態の存在は、言うまでもなく、それに先立つ何らかのコミュニケーションや共同行動の結果としての産物であるからである。これほど単純で形どおりの循環論は、むしろ珍しい。だがしかし、循環的な枠組または構造をもつものとして、問題としなければならないのは、恐らく単なる筆者の（上述の如き）考え方ではない。筆者は、現実のコミュニケーションや共同行動の過程の一側面に注目して、そこに見出される事実・事態をそのまま指摘し記述しただけであって、その記述されたものの意味内容に循環構造が見出されるとすれば、それはむしろ、コミュニケーションや共同行動の現実の過程そのものがその種の構造・枠組を包含し潜在させているのだからである。

そこで、コミュニケーションや共同行動の現実の過程そのものが、既にそれ自体の内に循環的構造を包含しているとすれば、——それが論理的形式として見られた場合の欠陥または背理を指摘して、事済めりと決め込んでみても、明らかに当を失っているのであって——、この場合に肝要なことはむしろ、その種の循環的な構造を有する現実の事態ないし過程の、まさにその循環の鎖の環を、その始源のあり方へと徹底して辿り返してみることに、である。かくして、結局、個々人のコミュニケーションや共同行動の経験が、その循環の鎖の環を辿って、彼（女）の経験の始源に向かって遡られる。そして、そのような循環の鎖の環の先端部分、その始まりの地点に、恐らく母子「相互作用」が存在し、機能していることになる。

さて、母子「相互作用」は、その作用の過程それ自体のうちに奇妙な事態を伏在させている。最初期の母子関係は、恐らく、文字通りの意味において「相互」作用ということのできるような機制ないし構造を、未だ保持してはいない。「相互」作用という限り、それは、当事者相互の間の——作用および反作用としての——コミュニケーションまたは共同行動の能力における、基本的な、最低限度の対等性を既に暗黙の仕方で前提しているが、最初期の母子「相互作用」においては、「子」の側に、明らかにその種の対等のコミュニケーションまたは共同行動の能力を認めることは困難である、からである。「子」の側に対等のコミュニケーションや共同行動の能力が未だ存在していないことを最も端的に示すものは、彼（女）が未だ——母との間に——一定の共通の内的な意味体系を所有していないし、それ故また、個々の具体的な状況において共通の仕方では理解し行使すべき固有の意味の諸文脈も未だ知らない、ということである。だがしかし、それにもかかわらず、母子関係は間もなく、まさに「相互」的というに相応しいほどの内実と構造を帯びるようになる。母子「相互」のやりとり——意味体系の共有と固有の意味文脈の共同の行使を含んだ、基本的に対等なコミュニケーション・共同行動——が始まる。さて、そこで、対等な性格の、文字通りの母子「相互作用」は、まさにどのような過程を経て始まるのであろうか、その種の対等な「相互作用」が始まる以前に、既に働いていた最初期の母子関係は、それに固有の——そして、間もなく対等の「相互作用」へと転換していく——如何なる基本的な機能を包含しているのであろうか。このような問題は、まさに現実の事態に即した問題として、果たして成り立たないものであろうか。本稿は、まず第一に、このような問題

を（人間の発達過程に関して）実際に成り立ち得る問題、問われるべき問題として、具体的且つ明確に限定された形態において提出すること、そして、第二に、この問いに対して一つの解答を（勿論、仮説的な性格のものとして）提示してみることを、課題とするものである。

第一章 母子「相互作用」の特異な地位と性格

——通常のコミュニケーションまたは共同行動の構造との比較において

第一節 通常のコミュニケーションまたは共同行動の構造

1.) 通常のコミュニケーションまたは共同行動の諸過程

本稿における筆者の問題関心は、——既に「はじめに」において述べた通り——主として、人間相互のコミュニケーション活動が含んでいる人間形成的機能の考察、にある。人間の成長や発達過程に与り、形成的に寄与する条件となるものは、勿論ひとりコミュニケーション活動だけではない。だが、しかし、コミュニケーション活動こそが、その種の機能を担う主要な条件であるということもまた、疑うことのできない事実である。人間的なコミュニケーションの働きかけ合いの関係の枠外に切り離され、それから孤立して育つこととなった、幾例かの「野生児」l'enfant sauvage, feral manの不幸な事例が、その事実を逆の仕方で裏づけている。

本稿は、また、コミュニケーションそれ自体の研究、例えば多種多様なコミュニケーションの存在形態や同じく多様なコミュニケーションの内部的諸過程を展望しつつ、その「本質」——即ち、一般的な特性——を考察したり、特殊な存在形態をとる或る種のコミュニケーションまたは或る種のコミュニケーションの一定・特殊な内部的過程をそれ自体として究明したりすることを、目的としているわけではない。重ねて言えば、コミュニケーション活動を通じて、人は一体如何にして形成されるのかということが、筆者の関心である。人間形成ということで、ここでは、大別して、知識や技術等比較的客観的な情報を伝達し習得せしめることと、それに先立って為される、根本的な精神的態度や性向の形成とが、考えられている。従って、筆者にとって、この場合に肝心なことは、上述のような意味での人間形成的機能と密接な関係が認められるコミュニケーション活動、しかも、また誰もがそれとして疑いを挿しはさむことのないような、典型的なコミュニケーション活動の形態や種類を想定し指摘すること、である。そして、その種のコミュニケーション活動として、われわれは、日常普段の生活の過程での共同行動の場面または状況におけるコミュニケーションを、念頭に思い浮かべることができる。そこでは、コミュニケーション、即ちコミュニケーション活動は、行動の共同の核心を成す過程、それと連続した一体・不可分のものとして、経験されている。また、日常的な生活過程そのものが孕んでいる人間形成的な働きは、早くから気づかれていて、例えば「機能的教育」die funktionale Erziehung等の名で呼ばれてきた。その種の無意図的な形成機能に人々が次第に気づいて、それを抽出し組織化していく過程が、意図的・制度的な教育諸機関の形成と発達の過程であったわけである。

そこで、本稿は、日常生活の過程において最も典型的な行動の共同（共同行動）の場面と結びついたコミュニケーション活動をとりあげて、そこに見出されるコミュニケーション活動の構造、即ちその一般的な諸特性を指摘し、その種の構造または一般的諸特性（のあり方）と先

述した人間形成的諸機能との関連を明らかにする、という手順をとることになる。

まず、最も典型的な特徴を具えながら、同時にまた極めて単純な構成内容をもった、日常生活の過程に見出される共同行動とコミュニケーションの事例として、次のような場面を提示する。これは、J. Dewey, *EXPERIENCE AND NATURE* (The Later Works ed., pp. 140-142.) において、コミュニケーション活動の分析のために取り上げられていた事例を、筆者がまとめたものであって、A が B に花（瓶）を持ってきてくれるように、それを指さし、B がそれに応じて花（瓶）を持って行って A に手渡す、という場面である。

まず、A が動作を起こして花（瓶）を指さす。（A は、その時、自らの動作に対する B の理解の仕方を考慮に入れた上で、自らのその動作が B において自分の意図するような協力の行動を適切に惹き起こすことを予想して、その指さす動作を為す。A は、B の立場に立って、その生起すべき状況——即ち完成された共同の行動——を理解し、理解されたその B の状況の中に自らの為すべき行動を位置づけて、これを行うのである。）同時に、A は、B が予期した通りの動作に立つのを見て、次の動作、つまり B から花（瓶）を受け取る行動の準備的な反応動作に入る。B は、まず、A の動作——正確に言えば、A が動作を起こしたこと——に反応する。B の反応は、しかし、A の動作そのものに対する直接的な反応に終わるのではなくて、直ちに A の動作を指示として理解し、この指示としての A の動作に向けられる。B の反応は、さらに指示それ自体に対してではなくて、それを何かあるものの指示、花（瓶）の指示として理解して、指示されたその事物、花（瓶）に移る。（A の動作は、B によって、A の立場に立って、まさしく指示として、それも花（瓶）を指示する動作として理解される。花（瓶）に惹きつけられた B の反応は、さらに花（瓶）に対する直接的な反応動作となって現れるのではなくて、花（瓶）が A に対して有する関係を理解し考慮に入れた上で、この関係を実現するために自らが果たすべき行動を予見して、この予見された行動の形態をとって現れる。B は、A の立場に立って、その場合の状況——即ち完成された共同行動、B から A が花（瓶）を受け取ること——を理解し、理解された状況の中に自らの分担すべき行動を位置づけて、これを果たすのである。）かくして、B は、花（瓶）を手に取り、それを持って行って A に差し出し、A の準備的な動作はそれを受け取る行動となって現れる。ここにこの共同行動またはコミュニケーションは完結する。

2.) 通常のコミュニケーションまたは共同行動の一般的構造

上に紹介した事例は、比較的単純で且つ基本的な形態のコミュニケーションまたは共同行動の一事例である。日常普段の生活過程において、われわれは、その場面や状況を規定する諸条件の変化に応じて、さまざまに変化した形態のコミュニケーション・共同行動にでくわし、それに入り込む。それらは例えば、コミュニケーション・共同行動が描定される、社会関係の次元またはレベル——個人間か、社会集団間か——によって、コミュニケーション・共同行動の基本的機能や性格——共通の目標達成のためか、成員相互のまとまりそのものの維持のためか——によって、用いられるメッセージやメディアの特性——言語的か、非言語的か等——によって、さらには意思の伝達と共有の仕方——比較的一方的か、相互的か——によって、多様な形態をとって現れる。従って、また、それらの多様な形態のコミュニケーション・共同行動の内部諸過程の分節の仕方も、自ずから多様なあり方をとることになる。

ただ、われわれの関心は、専らコミュニケーション・共同行動における人間形成的機能にある。コミュニケーション・共同行動が、それに参加する成員に新たな知識・技術を習得せし

め、精神的な基本的性向や態度を形成するのは、一体どのような具体的過程を通じてなのか、ということである。このような関心と観点に基づいて、われわれはさらに、多種多様な形態の通常のコミュニケーション・共同行動における三つの特徴的な傾向または側面に、そしてただそれだけに、注目する。それは、即ち、第一に、いわゆるメディアおよびメッセージ内容としての事物・事件が介在していること、第二に、コミュニケーション・共同行動の成立の前提条件として、成員に共有された一定の意味文脈——意味解釈のコード——が存在していること、第三に、共通・共同の目的・目標によって動機づけられていること、の三点である。これらの三つの傾向、側面または特性は、今さら言うまでもないほどの単なる陳腐な事実の指摘ではあるが、それらの傾向・特性のうちこそ、人間形成的な働きが潜んでいる、とわれわれは考える。そして、これらの傾向・特性は、単に陳腐で自明な事実と見えるほどにまで、一般的にゆきわたった、コミュニケーション・共同行動に広く共通して含まれているところのものである。そこで、次に、われわれは、通常のコミュニケーション・共同行動に一般的に見出される、この三点にわたる特性・傾向について、より一層具体的に考察し、その意味内容を展開してみるとともに、その人間形成的機能への関わりを考察することにしたい。

多様な通常のコミュニケーション・共同行動に共通して、一般的な規模で見出される特性・傾向として、第一に、それらにおいては、働きかけ合う成員相互の間に、常に事物または事件が介在しているということが、指摘される。事物や事件は、メディアの素材を成すものとして、さらには、そのメディアを用いて構成されるメッセージにおいて、その取扱い・対応の仕方が言及されているものとして、言わば二重の仕方で、そこに介在する。メディアとしては、音声や文字から、身振りや表情を経て、謝意の贈り物に至るまで、多様なものが存在しているが、それらを何らかの仕方で行使することなしには、心中の意図や印象を表出して相手に伝えることはできない。これらの多様なメディアの素材は、それが空気であれ、紙とインクと光であれ、電波であれ、自らの身体的一部分であれ、それは事物であり、その加工されたものである。また、一定のメディアを用いて構成されたメッセージが表示する意味内容は何かと言えば、それは、共通に理解され、共同で果たされるべき一定の行動や操作、つまり事物や事件——花(瓶)や帽子や危険な出来事等——の一定の仕方での取扱い、事物や事件への一定の仕方の対応である。勿論、この場合、メッセージがその意味する内容として、その取扱いについて言及している事物や事件は、必ずしも現実の具体的な事物や出来事であるとは限らない。そこでは、観念的な事物が取り扱われるし、また事物・事件が観念的な操作においてのみ取り扱われる場合もある。

かくして、コミュニケーション・共同行動は、二重の意味において共同で事物を取扱い、事件に対処することであるが、また、そのことによって、コミュニケーション・共同行動の成員たちは、その過程に入り込んでくる諸々の事物・事件の取扱い方——それらの意味——を確認し、また新たに習得していく機会を持つことになる。

多様な通常のコミュニケーション・共同行動に共通して見出される、一般的な特性または傾向として、第二に、その個々の過程に先だって、既に当事者、成員の間に共有されて行使されている一定の意味体系の存在が、指摘される。彼等は、その意味体系——その一定部分としての意味文脈——に依拠し、それを行って、相互に働きかけを始め、共同の目標を設定すると

ともに相互の役割を了解し合い、各自の所作のその場合の特殊な意味を解説・理解し、共同の課題の成就や終結を確認し合う。言葉やメッセージは、それだけで、発話者・送り手のその場合の特殊な意図や印象・イメージ等を十分に表示し伝達し尽くすことのできるものでもともとない。言葉やメッセージは、それが発せられるその時々状況に即して、その意味内容が具体的・特殊なものに限定されて理解されなければならないが、そのような限定的な理解を可能とするのが、当事者間で共有されている意味体系への参照である。言葉やメッセージは、その種の、意味解説の共通の土台としての意味体系の補完的な働きを、初めから頼りとして発せられているのである。先に掲げた事例においては、Aは、予めBの立場に立って指さしまたは一定の音声を発しているし、またBの側でも、そのAの指さしや音声に直接に反応するのではなくて、Aの立場に立ってその所作の意味を解説し理解して、それにちょうど対応する自らの役割を判断しつつ、その反応行動を為している。AがBにその働きかけをすることに先立って、彼（女）は二人の間に既に存在し機能しているところの、ものごとの共通の理解の仕方、即ち共有された意味体系を確認し、それを予め当てにすることができたのである。言葉やメッセージは、一定の具体的で特殊な行動の状況においては、いつでも、いわば「指標」indexとして機能するのであって、当事者たちは、それを手がかりとして、共通に所持する意味体系の中から、一定の意味文脈を検索して取り出し、それを以て彼の言葉・メッセージの意味内容を補完しつつ理解するのである。

当事者間で共有されている意味体系は、価値観や情緒の傾向あるいは美的な好み等から自由で中立的・中性的な、専ら知的に操作される冷淡な意味の脈絡である、と考える必要はない。それは、当事者をはじめとする周囲の人々の間に広く通用している基本的な行動様式または生活様式とでも言うべきものであって、日常生活のあらゆる場面で人々の行動・態度を動機づけているものである。その体系に編み込まれているそれぞれの意味とそれらの脈絡は、知的・客観的な傾向とともに、また道徳的・情緒的・美的な好みや傾向をも未分化のままに統合して含んでいると考えられる。

コミュニケーション・共同行動を他者に働きかける場合であれ、他者からその働きかけを受ける場合であれ、われわれが、その他者との間に一定の意味体系を共有していることを、したがってまた当面の事態についての共通理解を確信することができるのは一体どうしてなのか、という問いがこの場合さらに可能であるが、それに対しては、私と彼（等）とは或る同一の共同生活または生活共同体に属しているからであると答えることができる。両者が共に所属している共同生活や生活共同体は、単一の場合もあるし複数の場合もあり、またその共同における親密さの程度や共同の目的・意味は多様である。しかし、そのいずれにせよ、人は、或る集団に所属するや否やそれに固有の一定の意味体系を共有した者と看做され期待される。そして、その意味体系に基づいた各種の働きかけを受けることになる。

多様な通常のコミュニケーション・共同行動に共通して、一般的な規模で見出される特性または傾向として、第三に、共通・共同の意図や目的の存在が指摘される。行動の意図とは、行動がもたらす諸結果を予見しつつ、その予見された結果の実現をめざして、その行動が着手される場合に、その予見された結果を指して言う。その種の意図は、行動主体によって常に意識されているとは限らない。持続的な努力や綿密な配慮を要する行動においては、その意図は明確に且つまた繰り返し意識されざるを得ないものとなるが、この水準に至ればそれは目標や目

的と呼ばれるに相応しいものとなる。

コミュニケーション・共同行動における意図や目的は、共通の関心事に関する共通理解の確立あるいは共同の問題への対処等の形態をとる。その意味内容は、最初からその全ての当事者・成員によって一致して明白に確認されて念頭に置かれているわけでは必ずしもない。むしろ、相互の働きかけ合いの進展の過程で、次第にその明確で且つ一致した理解が成り立っていくと考える方が、事実に近い。さらに、この種の共同の意図または目的は、各当事者・成員によって、その終局の目的の実現のためにそれぞれ分担すべき役割として、また他者がそれぞれ担うべき役割の体系として具体化される。Aによって提案され、Bによって理解され同意された共同の企ては、直ちに、さらにBによって、自らがそこで分担すべき役割行動の系例へと具体化されて、果たされる。かくして、共同の目的が主体的に理解され、積極的・能動的に引き受けられていくわけである。そして、念のため重ねて言えば、一定の特殊な状況としてのこの場面において、各成員が共同の目的（の意味内容）を共通の仕方理解し合い、それに基づいた自他の役割を相互に理解し期待し合う際に、参照し依拠するところのものは、他ならず、彼等によって共有されている一定の意味体系、その適切な諸部分である。

コミュニケーション・共同行動においてその当事者たちを根本的に動機づけるものは、共同のものとして理解され思い抱かれたその目的の観念であり、それをさらに具体的に分節した役割の観念であるが、そうした目的や役割をまさにわがものとして積極的・主体的に理解し、引き受けることは、また、その程度の深淺の差はあれ、その当事者たちの精神的な性向や態度に一定の影響を残すことになる。共同の目的の意味内容やそこにおいて分担すべきわが役割の理解のために参照し依拠した、かの共通の意味体系が、彼等の精神的な性向や態度のうちに、一層重い意味を帯びて定着することになる。

3.) 通常のコミュニケーションまたは共同行動における人間形成的機能

人間形成の働きは、考察の便宜上、最も一般的に大別して、新たなる知識や技術等比較的客観的な情報の伝達と習得、および精神的な基本的性向・態度等、主観的・主体的な側面の形成という二つの側面ないし次元を考慮することができる。通常のコミュニケーション・共同行動は、その程度の差はあれ、基本的に常にこの両方の側面または次元の形成機能を含んでいる。

コミュニケーション・共同行動は、その過程に入り込み、介在することになった事物やできごとを、成員たちが共同で行使し、取扱いまたはそれに対処する過程であると考えられるが、その過程で成員たちは新たな知識や技術に触れ、それに習熟していく。一方、事物やできごとの知識とは、正確に言えば事物やできごとの意味の知識であり、事物やできごとの意味とは、それが他の事物やできごととの間に有するところの相互関係の、換言すればその事物やできごとの出現の諸条件およびそれがもたらす諸結果の、認識されたものである。成員たちが共同で行う事物やできごとの取扱いの過程に、私も一定の役割を分担しつつ参加し、かくしてそのものを共同して取り扱うことによって、私はそのものの新たな扱い方を知るに至る。そのものが担っている新たな関係、新たな意味に眼を開かれ、それを知悉し、その取扱いに習熟していく。

既に述べたように、そこで取り扱われる事物やできごとの存在形態も、それを取り扱う仕方・方法も多様である。観察学習やモデリングの理論が強調しているように、現実の具体的な事物やできごとに直接に手を触れてそれを取り扱うという場合は、実際の普段の経験に照らして考えてみる限り、比較的少ない。直接的な行動の共同よりは、言葉を初めとする各種のシンボル

を観念的に操作するという形態をとった行動の共同や、他の集団の共同行動を観察する、いわば代理的な参加の形態の方が圧倒的に多い。だがしかし、この後者の場合のような間接的で高度な形態の参加や行動の共同が成り立つことができるのは、その人に、事物を直接に取り扱う共同行動の基本的な行動様式が既に獲得されて、内面化されているからである。

一方、当事者・成員たちの基本的な精神的性向・態度に働きかけ、それに影響を及ぼすのは、コミュニケーション・共同行動において、その共同の意図や目的（の具体的な意味内容）を理解し、それをわがものとして主体的に引き受け、それに積極的・能動的に参加する過程である。この過程は、前述した如く、さらに当該参加成員によって、その共同の意図・目的から——他の諸成員たちの役割分担の動向をも見定めつつ——その場合に自らが分担すべき役割を積極的に判断して引き受けること、そしてその役割において自らが果たすべきことから（その仕方と順序）の理解へと、具体化される。彼が、まさにこのような仕方で共同の意図・目的を理解して引き受け、さらに一定の役割取得の判断と操作を主体的に展開する際に、依拠し参照するもの——それは、その当事者・成員たちを含めて、彼等が共に所属している共同生活または生活共同体の人々に共有されて一般的に通用している、一定の固有な意味の体系である。

個々のコミュニケーション・共同行動の具体的な意図や目的は、その当事者・成員たちによって予め共有されている意味体系の一定の部分、一定の意味文脈を、いわば意識化し、具体的に知覚され得る形に形態化したものである。その種の共同の意図・目的を——その具体的な意味内容において理解しつつ——わがものとして引き受け、その中に自らの分担すべき一定の役割を見定めるということは、それゆえに、これまで半ば意識せずに自らも所有し、行動に際して依拠してきた、われわれの共同生活または生活共同体の共通の意味体系を、部分的にではあれ、意識化し且つ自らの精神的な性向や態度の一部として改めて取り入れること、を意味している。そのことは、また、彼が、当該共同生活または生活共同体へとより一層深く入り込み、そのより一層意識的な成員へと成りゆくこと、でもある。

個々のコミュニケーション・共同行動は、かくして、それに参加した当事者たちに、彼等が半ば無意識的に依拠している共同の意味体系を、部分的にではあれ、形態化して示すことによって、そしてまた、その当事者たちをより一層意識的で確実なその成員と為すことによって、その母胎を成す共同生活または生活共同体の存続と発展に寄与しているのである。

第二節 共同生活または生活共同体への原初的な参加の問題、および、母子「相互作用」の特異な地位と性格

通常のコミュニケーション・共同行動に共通して見出される一般的な特性または傾向の一つとして、われわれは、その個々の過程に先だって、既に、一定の意味の体系が当事者、成員の間に共有されて行使されているということ、を指摘した。そして、それにつけ加えて、さらに、コミュニケーション・共同行動において、その当事者、成員たちが、他者との間に、その種の意味体系を共有していることを予め——自明のこととして、暗黙の仕方で——確認し、したがってまた、他者との間に当面する事態について共通理解が可能であることを前以て確信することができるのは、一体どうしてなのかという問いが不可避となること、そして、それに対しては、彼等が共に同一の共同生活または生活共同体に所属しているからであると答えることがで

きることを、指摘しておいた。

さて、「はじめに」において既に示唆しておいたように、ここには循環論の構造が存在する。個々のコミュニケーション・共同行動に先んじて、既にその当事者の間には、共通理解の装置として、一定の意味体系の共有が成り立っていないけれども、一方この意味体系は、それ以前の相互の働きかけ合いの結果としての産物であると考えざるを得ない、というわけである。この循環の構造が、単にわれわれの思考や観念操作の誤りから生じてきたものではなくて、現実の事態そのもののうちに潜んでいるものであるとすれば、われわれにできることは、唯一つ、その循環の螺旋の環を辿りつめて、その始源のあり方へと遡ることである。そして、それこそがまた、今ここでわれわれの関心の焦点を成すものでもある。この循環の螺旋の環をその始源に向かって遡ることは、また、コミュニケーション・共同行動の個々の当事者が、今問題となっている意味体系の生成と存続の母胎を成す、共同生活または生活共同体に原初的に参加する場合の、その仕方を問う問題とも結びついている。何故ならば、個々の当事者が他の当事者たちと共通の意味体系を所有し始めるのは、まさにその意味体系を包含して通用せしめているところの、人々の一定の共同生活または生活共同体に、彼が参加し所属し始める時からである、からである。そして、個々人が参加・所属することになる多様な共同生活または生活共同体の中でも、その最初に位置するもの、そして他の多様な形態の共同生活や生活共同体へと新たに参加・所属していく際に、それらの試みや企てを——その原基的形態として——準備し、動機づけ、支えるものは、通常、言うまでもなく家族関係であり、特に母子関係である。母子関係、母子間の相互の関わり合いの機制が、そしてその具体的な考察が注目される所以である。

すべてがまさにそこで始まるところの母子「相互作用」を、さらにその最初期にまで遡れば、そこにはいわゆる新生児期の母子の関係が存在している。誕生後2ないし4週間の新生児期 neonatal period は、専ら、あるいは主として生物学的プログラムに基づいた、諸種の反射的な反応行動に終始する時期である。この時期の中頃から、生得的な反射反応が固有のリズムを失い、その機能を減退させて、解体し消滅していくが、それに取って代わって、未だ断片的なものではあるが、随意的な性質を帯びた各種の原初的な反応行動が出現し発達し始める。脳の発達も、このような反応行動のメカニズムの根本的な変化と対応して進行する。生得的な反射反応は専ら延髄その他の下位脳の機能に依存しているが、その一方で、大脳新皮質の神経細胞、錐体細胞が突起（シナプス）を伸ばして細胞間に機能的な連結組織を作りだし、連結部を髄鞘化して神経系としての信号伝導の機能を可能なものとしていく。

さて、母子「相互作用」をその最初期、新生児期にまで遡って考察すると、そこに展開される母子関係の——通常のコミュニケーション・共同行動と比較した場合の——特異な性格が、明らかになる。その場合の母子関係、母と子、つまり新生児との間の関わり合いは、通常の意味における「相互的」な関係ではない。そこでは、(通常の意味での)「相互的」な働きかけ合いは成り立っていない。専ら生物学的プログラムに基づいて反射的の反応を繰り返す新生児は、母の側からの働きかけに応じてそれを為しているわけではない。新生児の反射反応は、ヒトという生物学的種に一般的な反応の単なる繰り返しであって、もともと眼前の相手の所作に対して(それに応えて、それを理解して)為された反応ではないのである。新生児の反射反応が、母の側の対応行動と本質的に同じ性質・同じレベルのものではないということを最も端的に示すのは、両者の反応行動をそれぞれ統制しているプログラムが全く異質であるということであ

る。新生児は、母の側が所有し行使しているような、一定の共同生活または生活共同体に共通の意味体系を未だ持つには至っていない。そして、この種の意味体系を所有——共有——することなしには、働きかける相手の所作に即応して、即ち、相手の所作の意味ないし意図を理解して、自らもまたその場の共同の状況に参加する意図を以て、適切な意味を帯びた反応を為して返すことはできないのである。

一定の意味体系の共有が未だ成り立っていない、その意味において基本的に対等性または「相互的」性格を欠如しているように見える、この最初期の母子関係、その働きかけ合いは、それでは一体どのような特殊な機制または構造を以て成り立っているのか。この問題を具体的に考え抜くことによって、また同時に、意味体系の共有が初めて成り立ち、共有された意味体系に基づく「相互作用」の過程が確立される、その移行過程の基本的な仕方・仕組みが明かになる、と思われる。

第二章 母子「相互作用」を特徴づける一般的構造と、それに特有の人間形成的機能

第一節 母子「相互作用」の具体的な諸過程

まず初めに、幾つかの事例を挙げる（やまだようこ『ことばの前のことば——ことばが生まれるすじみち 1』, 1987, 新曜社, より）。

またまわりの人々も最初から、新生児を社会的ネットワークのなかへ迎え入れ、家族の大切な一員として接する。新生児は、自身もまわりの人々からも、一人の人間として認められるようなかたちで生まれてくるのである。（p. 46.）

そこでおとなは自分を基準にして想像力の翼を広げ、呼吸器のけいれんにすぎない呱呱の声を母親と離れるときの不安の声だと考えたり、乳房を口に含んでいるときを母親との一体感に包まれた至福のときとみたり、さまざまに乳児の気持ちを夢想してきた。（p. iv.）

（0・0・8）今まであまり強い把握反射はみられなかったが、今日はゆうの手の中に母が指を入れてやると力を入れて握ることがある。自分の手を吸いたそうに、口を開けてしきりに手を動かすが、なかなか口に入らない。母が助けてやろうとして、ゆうの手を口の方へもって行ってやると、力が逆に加わってかえってうまく口に入らない。偶然に口に入ると吸う。（p. 246）

（新生児に対しては）覚醒時には、高音でしかも一回に5-15秒程度の連続音がよいと言われている。おとなの側も「バー、バー、いい子、いい子」など赤ん坊に高い声で短く切った話しかけをくりかえすことが多く、新生児が最も注意しやすい話しかけを知らずしらずのうちにやっているのである。（p. 47.）

生後3か月ごろの乳児の微笑は、母親に、「あら、この子、私の顔がわかるようになった

のだわ」と母親冥利につきる気持ちにさせる。そして、母親のほうも、乳児の顔を見て思わず微笑するので、微笑みのやりとりは、かなり長く続くことになる。実際には乳児は、母親の顔がわかっているわけではなく、顔パターンに反応しているにすぎない。しかし、人間関係をつくり出すのに重要なことは、「分かっているようにみえる」ことであり、それは、相手がはたらきかけてきたときに、すかさず、間に「合う」行動がとれるかどうかで決まるのである。(pp. 63-64.)

この最後の事例は、3か月頃のものであって、新生児期のものではないが、むしろ母子「相互作用」における母の側の働きかけの一般的な機制を見事に示してくれているので、取り挙げた。

これらの事例に共通して見出される母と子の間の働きかけ合いの一般的な過程を指摘すれば、それは次のようになる。

まず、母（または大人）が、子（新生児）を、「一人の人間として認めて」、何らかの働きかけをする。あるいは注目して見守る。

子はそれには無頓着・無関心であるか、または反射的に反応する場合がある。

すると、母（大人）は——「知らずしらず」、「自分を基準として」——その反射反応の中に、子（新生児）の「気持ち」、即ち意図を認めて、

さらに、それに反応する行動を為して返す。

この一連の過程を眺めて、間もなく気づくことは、次の二点である。即ち、母（大人）が、子（新生児）の反射反応の中に、「自分を基準として」、一定の「気持ち」、つまり意図を認めていること、および、そのような（「想像力の翼を広げ」て行う）操作を、殆ど「知らずしらず」に行っていること、である。これらのことは、改めて考え直してみれば、非常に奇妙なことである。しかも、それは奇妙であるだけではない。それは、さらに深く考えてみると、母と子（新生児）の間の関係に不可欠の本質的な操作過程であるように思われる。「知らずしらず」にそうしてしまっているということが、その種の操作を含んだ反応態度の根深さを示唆している。やまだようこ氏の、「しかし、人間関係をつくり出すのに重要なことは、「分かっているようにみえる」ことである」という言葉は、まさにこの問題の焦点を言い当てている。

第二節 母子「相互作用」に固有の一般的な構造

——母と子（新生児）の間の「相互作用」は、如何にして成り立っているか、という問題

母と子（新生児）の間の「相互作用」を特徴づける、固有の機制ないし構造については、既に前節において示唆した。ここでは、その特徴的な機制または構造を、われわれのこれまでの考察の文脈と照合させつつ、さらに具体化して描き出してみることによって、母と子（新生児）の間の「相互作用」の成り立ちの仕組み、その独特の成り立ち方を明らかにしてみたい。

新生児の先天的・生得的な、生物学的プログラムに基づく反射反応には、彼（女）自身の意識や意図は、未だ勿論ない。

だが、しかし、母の側は、事実上——つまり、自らはそれと意識せず、「知らずしらず」——その子（新生児）が、その反射反応の所作を、あたかもそれに応じた一定の意図や意識を以て為した、というふうに取り、看做す。母の側が、まさにそのような仕方、子（新生児）の

反射反応の所作に一定の意図や「気持ち」を認めるということは、子（新生児）の側が一定の共通の意味の文脈を——即ち、その場の二人の働きかけ合いの意図や目的と、母子それぞれが分担すべき役割と、今日下の問題の焦点を成す当該所作の意味とを、二人で共通に理解するための意味の文脈を——既に所有し行使していると看做して、子（新生児）の所作の背後に、その所作を意味づけるものとして、挿入し仮設すること、である。母によって、子（新生児）は、既に彼女と同等に意味体系を所有し、その部分としての一定の意味文脈をその反応行動に当てて行使している者と看做されているのである。母は、「自分を基準にして」子（新生児）に対応しており、子（新生児）を「一人の人間として認めて」いるのである。この機制こそ、母子関係を最も根本的に特徴づけるところのものである。

しかも、さらに重要なことは、この種の機制を含んだ操作が、母の意識や意図とは別個に、「知らずしらず」に事実上、為されてしまっているということである。そうするのは、単なる見え透いた芝居や演技としてでは勿論ないし、また単なる無知の為せる業でもない。新生児の反射反応の新たな知識は、母の——世界中の母の——この種の（赤ん坊の所作の背後に明瞭な意図を読み取ろうとする）操作や対応の態度を決して変えることはできない。新生児に対して語りかける母親にとって、そのことは殆ど自明の事実なのであって、それ以上に現実的な事実などというものは存在しないのである。母親のみならず、赤ん坊に直面する者は、誰であれ、全く彼女同様にそのことを確信し、彼女同様に振る舞い、赤ん坊を取り扱う。そして、そのことは、間もなく、誰が見ても、即ち客観的な意味においても事実となってしまう。新生児はやがて意図を行使する主体、乳児や幼児へと成長する。

さて、（その子、新生児の反応・所作に意図を認め、その背景として意味文脈の行使を感じ取った）母の側は、今度は、あたかも、その子の所作のまさにそのような意図にちょうど応えるかのように、自らの役割を設定し、それに応じた反応行動を為す。即ち、その子の所作の背後に、自らが先に仮設・挿入したところの、この場合の二人にとって共通・共有の一定の意味文脈に母の側自らも則って、自らの役割行動を判断・設定し、そして、それを果たすわけである。勿論、この場合も、それらのすべての操作の過程は、事実上、つまり「知らずしらず」という仕方、で、為される。

そして、さらに、その結果、母の側は、自らがその場面に応じた役割行動として為した反応の意味ないし意図を、子（新生児）の側もまた適切に理解し、納得して、満足し喜んでいる、というふうに解釈し、こちらもまた真実——つまり、それと意識せずに——満足する。

かくして、母と子（新生児）との間の一連の共同行動、一連の「相互作用」が、完結する。

因みに言えば、母の側が、子（新生児）の反射的な反応動作に一定の意図や意思を認めること、換言すれば、子（新生児）の所作の背後に、その所作を支え意味づけるものとして、一定の意味文脈の発動・行使の過程を仮設し挿入すること、しかも母自身は自ら意識せずしてまさにそのようにすること——母の側のこの種の、母子間の「相互作用」を辛うじて支えるための、自らは意図せざる操作は、次第次第に必ずしも必要ではないものとなっていく。その種の操作が実質的にその意味を減じていく、その理由は、子（乳児、そして幼児）の側に、単なる生物的反射反応とは異なった、まったく新たな随意的反応行動の機制が徐々に成立してくるから、である。母の側の自らは意識せざる予言的確信が現実の事態となって実現してくるから、である。

ところで、母子間の「相互作用」を支えるこの種の母の側の対応の意図せざる操作を、単なる「強化」、いわゆるオペラント条件づけ operant conditioning の「強化」reinforcement の事例と看做して説明しようとする見解が、広く通用している。本稿の考察は、その種の見解に対して疑問を提起することを一つの目的としている。そこで、以下、三点にわたって、その疑問を具体的に提示しておきたい。

第一に、母子間の関わり合いにおいては、子（新生児）の側が、既に、その反応行動において、意図を持つ者、その自らの所作の意味を理解している者、意味文脈を共有し行使している、「相互作用」の一方の主体として——事実上、「知らずしらず」に——看做され前提されて、それに基づいた働きかけを受けているのであるが、それに対して、「強化」の理論において関心の焦点に置かれるものは、——子（新生児）の側における、その種の意図の有無、意味文脈の所有の有無を問わず、それらの有無を超えて存在し機能するところの、問題の反応行動（の出現確率）と、特定の刺激事象（報酬としての刺激事象、即ち「正の強化子」positive reinforcer および嫌悪刺激、「負の強化子」negative reinforcer）との間の関連である。母の側の働きかけは、「一人の人間として認め」た上で為されるものであるが、「強化」の理論の説明においては、この点は全く関心または問題設定の枠外に排除されてしまっている。

第二に、母子間の働きかけ合いにおいては、一定・特殊な反応行動それ自体、その反応のそのままの、全く同一形態での定着と再現がめざされているのではなくて、むしろ、当該反応行動の意図あるいは意味の理解の定着、というより一層明確な意識化が、——事実上、「知らずしらず」に——めざされているのであるが、それが「強化」の過程として考察・説明される場合には、一定の反応行動それ自体の再現、つまりその出現確率の向上が問題の焦点を成すものとされて、専ら注目される。所作の意味を理解し、意図を以て反応・行動する、共同行動の一方の主体に対する働きかけとしての、母の側の働きかけの最も主要な意味または意図は、「強化」の説明からは、完全に除外されてしまっている。

第三に、母子間の働きかけ合いにおいては、子（新生児）の側を、一定の反応行動へと動機づけているものは、個々の反応行動の具体的な個々の諸結果、特に単なる外的な諸結果というよりはむしろ、母とともに為すところの共同の働きかけ合いそのものの成就、母との間の意思の疎通と意味の共有が彼（女）にもたらす喜びであり、「相互作用」における有能な役割分担者であり一個の行動主体であることを自ら確認しようとする意欲である——と看做されて、主としてそのような動機づけの理解に基づいて、母の側からの働きかけが展開されているが、それに対して、母の働きかけが「強化」の過程として理解される場合には、子（新生児）を一定の反応行動へと動機づけるものとして、当該反応行動と結びついた、「強化子」としての具体的な刺激事象の動機が限定されて、専ら注目される。特に、その「強化子」としての刺激事象が、子（新生児）の側における行動の共同あるいは「相互作用」そのものへの意欲の有無とは関わりなく、それを超えて、生命体または有機体としての反応行動の担い手に対して有するところの、報酬または嫌悪刺激としての関係こそが、専ら動機づけの機能を担う条件として考慮されるわけである。

要するに、「強化」の理論は、母子間の「相互作用」を部分的に説明するものではあろうが、その過程の全体としてのあり方・機制を説明し得るものではないし、まして母の側の働きかけを根本的に動機づけているもの、その機能を言い当てているものでは決してない。

第三節 母子「相互作用」における人間形成的機能の具体的内容と意味

母子「相互作用」における人間形成的機能の特徴、即ち、その後に展開される諸種の通常のコミュニケーション・共同行動の形成的機能と比べて、母子「相互作用」が含んでいる人間形成的機能の特徴づける根本的な相違点としては、次の三点を指摘することができる。それは、第一に、母子「相互作用」において、子は、初めて、共同生活または生活共同体の成員となるということ、第二に、母子「相互作用」において、子は、初めて、具体的なコミュニケーション・共同行動の成員となるということ、第三に、母子「相互作用」において、子は、初めて、意図的・主体的な仕方で共通の意味体系を行使し、コミュニケーション・共同行動における自らの役割を意識的に担う者となること、の三点である。次にこれらの三点の機能について具体的に考察することによって、母子「相互作用」が含んでいる形成的機能の、コミュニケーション・共同行動の始源としての性格を明らかにしてみたい。

既に（第一章の第二節において）述べたように、人が誕生後に初めてその成員となる共同生活または生活共同体は、通常家族生活である。そこで、問われるのは、彼は、いつ、どのようにして、その家族生活の成員となるに至るか、ということである。その問いはまた、新たな存在を自らの家族の一員として認めるということとは一体どういうこと、具体的にどのような対応の態度・行動をとることを意味するのかという仕方に、言い換えることもできる。法律的または儀式的な意味を別にして考えれば、母となる人を始めとして、家族成員が新たな存在を迎えてその生活様式・生活態度を現実根に根本的に転換し再構成するのは、彼が誕生した時点である。新たな生命の誕生は、ただそれだけで、家族成員に重い衝撃を与え、否定なしに従前の生活態度や行動様式を一定の仕方再編することを迫る。家族成員は、誕生した生命を新たに迎え入れるに十分に適した仕方、各成員の役割を再配置し、新成員の役割をも設定・配置しつつ、新たなそれぞれの役割に応じて自らの生活上の構えを根本的に立て直す。生活態度や行動様式におけるこの種の再構成の現実の諸過程こそ、新たな生命を自らの家族生活の成員へと迎え入れる実質的なまたは事実上の手続きであると思われる。その種の手続きの中で、新たな生命は、誕生しつつ、その家族の新たな成員となるのである。そして、そのような家族生活の生活諸様式の根本的な再構成の焦点となるのは、その生命の誕生によって現実のものとなり、実際に働きを始めた母子「相互作用」であり、母子「相互作用」に入り込んでいく母における生活様式——換言すれば、彼女が家族生活において参照し依拠すべき意味体系——の根本的な転換である。

さらに、われわれの日常普段の生活の事実即して言えば、家族成員の側における、そして特に母となる人における、生活態度の決定的な再編は、生命の誕生の時点より遥かに先だって、既にその生命の懐胎の時点で、そのことを確認することによって始まり、進展する。それ故、家族生活において新成員を認定する手続きは、この時から始まって誕生の時点に至って完結する、と考えることができる。

さて（第二に）、誕生後の新生児の反応行動は、殆ど生物的なプログラムに基づいた反射反応に終始するものであるが、彼（女）を家族生活の新成員として迎え入れた（母を中心とする）他の既存の成員たちは、彼（女）を成員と看做した、まさにそのこと、その手続きに基づいて、彼（女）の反応行動に意図を認め、その反応行動の背後に意味文脈の働きを感じ取り、かくし

て彼（女）とさまざまな仕方で働きかけ合う。自らと同じ共同生活の成員であると認めることは、われわれの通常の経験においては、殆ど自動的に、その相手に、われわれのものとして共有された一定の意味の体系の働きを——少なくとも、何らかの形で——認めることを意味している。母子の間の働きかけ合いを中心とした、家族成員と新生児との間のこの種の相互の関わり合いの機制については、既に第二章の第二節において詳述した。

最後に、家族生活に成員として迎えられ、その生活において共有されている一定の意味体系に基づく「相互作用」に既に事実上引き込まれ、相応の役割を担うものと看做されていた新生児は、その仮設され・期待された役割を、実際に・実質的に果たし始める。彼（女）は、自らのその役割行動の意味を感受し、それに対応し、その行動を意識的に為し始める。彼（女）は、成員たちの間に機能している意味文脈を理解し、それに関心を持ち、自らそれに反応して自分の反応行動を調整するようになる。彼の反応行動は次第に随意的な性格のものとなる。新生児が、このように、生得的な反射反応の水準を脱して、文字通り随意的な反応行動を習得して、それに習熟していく際に、その発達に関与する諸条件は、多様な仕方で想定されることであろうが、これまでのわれわれの考察の過程で示唆してきた条件としては、次の三つのものが挙げられる。即ち、それは、大脳新皮質における神経組織の機能の成熟、母を始めとする家族成員の——あたかも、彼（女）の反応行動が意図を持ち、その背後に意味体系の働きが存在しているかのように、その反応行動を取扱う——特有の働きかけの仕方、そして、彼（女）、新生児自身の「相互作用」することそれ自体への根本的な意欲、である。彼（女）は、脳神経組織の諸機能の成熟に基づいて、初めは、母（そして、家族成員）の側からの——「あたかも——かのように」という枠組を具えた——働きかけに、そのまま心身を託しているが、その繰り返しの中で、間もなくその枠組の図式を理解して、その枠組に基づいて自らの反応行動を意図的に調節し始める。彼（女）は、まさにそのように、初めから「一人の人間として」、または家族の一成員として、即ち、意図を有し意味を理解する存在として働きかけられ取り扱われているからこそ、期待されたままのそのような存在になるのである。そして、その場合に重要な意味をもつのは、母（そして、家族成員）のその種の働きかけが意図せざる性格のもの、したがって文字通り不断に行われるようなものであるということ、である。この種の母子関係に特有の働きかけ合いがもしも存在しなかったならば、脳神経組織の成熟していく諸機能も、子（新生児）の側の共同の行動への根本的な意欲も、ただ空転するばかりであることだろう。

＜参 考 文 献＞

池上嘉彦、『記号論への招待』、岩波新書、1984。

Harold Garfinkel, STUDIES IN ETHNOMETHODOLOGY, 1967, Prentice-Hall, Inc. Specially, Chap. Two STUDIES OF THE ROUTINE GROUNDS OF EVERYDAY ACTIVITIES, pp. 35-75., and Chap. Three COMMON SENSE KNOWLEDGE OF SOCIAL STRUCTURES: THE DOCUMENTARY METHOD OF INTERPRETATION IN LAY AND PROFESSIONAL FACT FINDING, pp. 76-103.

John Heritage, GARFINKEL AND ETHNOMETHODOLOGY, 1984, Polity Press. Specially, Chap. 6. ACCOUNTS AND ACCOUNTINGS, pp. 135-178.

- H. ガーフィンケル他, 山口・好井・山崎編訳, 『エスノメソドロジー——社会学的思考の解体』, 1987, せりか書房. 特に, 「1. エスノメソドロジー命名の由来」(H. ガーフィンケル), pp. 9-18, 「5. 受刑者コード——逸脱行動を説明するもの」(L. ウィーダー), pp. 155-214.
- K. ライター, 高山真知子訳, 『エスノメソドロジーとは何か』, 1987, 新曜社.
- 江原由美子, 『生活世界の社会学』, 1985, 勁草書房. 特に, 「第一章 生活世界の理論化をめざして」, pp. 2-24, 「第二章 生きられる世界の解体と再編」, pp. 25-55, 「第三章 生活世界の分化と疎外」, pp. 56-82.
- P. バーガー, T. ルックマン, 山口節郎訳『日常世界の構成——アイデンティティと社会の弁証法』, 1977, 新曜社. 特に, 「I 部 日常生活における知識の基礎 二 日常生活における社会的相互作用」, pp. 48-58, 「同 三 日常生活におけることばと知識」, pp. 59-80.
- G.H. Mead, MIND, SELF, AND SOCIETY, 1932, The University of Chicago Press. Specially, 9. THE VOCAL GESTURE AND THE SIGNIFICANT SYMBOL, pp. 61-68, 10. THOUGHT, COMMUNICATION, AND THE SIGNIFICANT SYMBOL, pp. 68-75, 11. MEANING, 75-82. 稲葉三千男・滝沢正樹・中野収訳『現代社会学大系 10 ミード 精神・自我・社会』, 1973, 青木書店, 特に, pp. 68-90.
- J. Dewey, EXPERIENCE AND NATURE, (The Later Works, Vol. 1., 1981, Southern Illinois University Press.) Specially, Chap. 5 NATURE, COMMUNICATION AND MEANING, pp. 132-161.
- R.C. クワント, 早坂泰次郎監訳『人間と社会の現象学』, 1984, 勁草書房. 特に, 「第四章 個人と社会的事実性」, pp. 181-232.
- 田崎篤郎「コミュニケーション」, 『現代社会学辞典』, 1984, 有信堂高文社所収, pp. 179-191.
- 尼ヶ崎彬『ことばと身体』, 1990, 勁草書房. 特に, 「五 「身にしむ」ことば——制度的意味と受肉した意味」, pp. 147-180.
- 大庭 健, 『他者とは誰のことか——自己組織システムの倫理学』, 1989, 勁草書房. 特に, 「I 間としての人—間」, pp. 1-156.
- 阿久津喜弘「コミュニケーション」, 『新版心理学事典』所収, (1981, 平凡社.)
- 谷 泰・臼井久和・奥井一満・杉山幸丸「コミュニケーション」, 『平凡社大百科事典』所収.
- A. バンデュラ, 原野広太郎監訳, 『社会的学习理論』, 1979, 金子書房.
- 柏木恵子, 『こどもの発達・学習・社会化』, 1978, 有斐閣. 特に「第5章 強化の働きをめぐる発達のな問題」, pp. 151-252.
- 東 清和・小倉千加子, 『性差の発達心理』, 1982, 大日本図書. 特に, 「III章 性役割行動の発達 5 社会化における性差」, pp. 202-209.
- J. ブルックス=ガン, W. シェンプ・マチュウズ, 遠藤由美訳, 『性別役割——その形成と発達』, 1982, 家政教育社. 特に「第四章 幼児期——性別役割の起源」, pp. 81-126.
- 三宅 廉, 黒丸正四郎, 『新生児』, 1971, NHK ブックス.
- 山内逸郎, 『新生児』, 1986, 岩波新書.
- 時実利彦, 『脳の話』, 1962, 岩波新書. 『人間であること』, 1970, 岩波新書.
- 荒井 良, 『胎児の環境としての母体』, 1976, 岩波新書.
- 三木成夫, 『胎児の世界』, 1983, 中公新書.
- 浜田寿美男・山口俊郎, 『子どもの生活世界のはじまり』, 1984, ミネルバ書房.
- 下条信輔, 『まなごしの誕生——赤ちゃん学革命』, 1988, 新曜社.
- 松田道雄, 『最新育児の百科』, 1987, 岩波書店, pp. 1-118.

- 小林 登, 『赤ちゃんの誕生——母と子のきずな』, 1984, 岩波書店.
 高橋恵子, 『自立への旅だち——ゼロオ—二才児を育てる』, 1984, 岩波書店.
 やまだようこ, 『ことばの前のことば——ことばが生まれるすじみち 1』, 1987, 新曜社.
 野村庄吾, 『乳幼児の世界』, 1980, 岩波新書.
 柳沢 慧, 『いま赤ちゃんが危ない』, 1990, フォー・ユー.
 T.G.R. バウアー, 岡本・野村・岩田・伊藤訳, 『乳児期』, 1980, ミネルバ書房. 『乳児の世界——認識の発生・その科学』, 1979, ミネルバ書房.
 岡本夏木, 『ことばと発達』, 1985, 岩波新書.

Some Characteristic Traits of Mother-baby Interaction, and Its Educational Functions.

Toshio KINEFUCHI

ABSTRACT

The purpose of this paper is to make clear some characteristic traits and educational functions of mother-baby interaction. Characteristic traits of the mother-baby interaction can be made clear, when we compare them with those of ordinary communication or concerted action in our every-day life. So, first, I make study of the general traits of our ordinary communication or concerted action. Secondly, I investigate some important traits of the mother-baby interaction. And then, I compare those basic traits of both cases. The most important difference between them is that mother-baby interaction lacks in a shared system of meanings between the two, which forms the most fundamental condition of the ordinary communication or concerted action.

The most characteristic trait of mother-baby interaction which lacks in a shared system of meanings is that in the process of interaction, mother supposes——unconsciously——as if her baby's actions were motivated by his own intention or a shared context of meaning. In so doing repeatedly, her baby becomes to be able to understand the meanings of her behaviors. And then, her baby becomes aware of the meanings of its own actions. And soon after, her baby will be eager to do something together with her.

Her child learns mother tongue, some basic manners of life, standards of judgment of values, and esthetic tastes and so on, mainly in its interaction with mother and other family members. Thus her child acquires and forms the main texture of its mental disposition. Her child grows and develops day by day.